
死亡→転生→学園都市…あるえー

Raven

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死亡↓転生↓学園都市…あるえー

【Nコード】

N2390N

【作者名】

Raven

【あらすじ】

とある夜の帰り道、俺は後ろから刺されて死んだ。

その聞いた最後の言葉は

「…間違えた」

おいまで、ぬっころすぞ。

その後、神様Ⅱ刺した本人と分かり俺の必殺の一撃が炸裂するなど紆余曲折あってとある魔術の禁書目録の世界に転生しました。

あ？適当？知ったことか今のおれはやることなすこと多すぎるんだ。

……………なんで転生者がこんなにいるんだよおおおおおおお！！

! ! !

プロローグ（前書き）

初めましてRavenと申します。
拙い文章になるでしょうが暇つぶし程度に読んでもらえると幸いです。

プロローグ

現在19時。といっても冬の19時というのは暗いもので田舎では人の通りも少ない。

「ていうよりまったくいねーなあ。さすが田舎」

別に馬鹿にしてるわけじゃなく生まれは…ここ以上の田舎で、育ちはほとんどこの町の俺『谷桐 正厘』^{たにとう ただり}からするとほめ言葉である。にしても市役所からの返りですれ違うのがおじいさん一人ってどうよ。田舎だよ。悪いかよ。

「…早く帰ろう。16巻が俺を待ってる！」

16巻というのは俺の今読んでいる本、とある魔術の禁書目録のことである。

いや、上条さんパネエっす。かつこよすぎだろあの人wwwでも一方通行さんもかつこいい！さすがロリく（不適切なコメントはベクトル変換されました）

とかアホなことを考えていると後ろからドンッとか何かがぶつかってきた。

「あ？」

何かと思って後ろを振り返ろうとする。が、背中が熱い。

「あ…」

首だけ回してみると少女が見えた。

その少女が一步後ろに下がる。その手には赤い包丁が握られている。それを見て、あー刺されたのかと他人事のように感じながら背中から徐々に痛みが強くなっていき、少女のつぶやきだけが聞こえた。

「…間違えた」

（おい、ちょっとまって）

口が動けば全力でツツコミできるのに悔やまれるとか馬鹿なことを考えながら俺は意識を失った。

ゆっくりと目を開くとそこは真っ白な空間でした。

「な、なんだってー（棒読み）」

とりあえず体を起してみるが正真正銘真っ白な空間としか言えない。だって全方位真っ白なんだもの。漂白剤顔負けの白さである。

「ん、目が覚めたかな？」

「んあ？」

声のしたほうに向くと少女がいた。金髪で少女。どうみても某魔法先生の吸血鬼ですね。あ？あれは金髪『幼女』だと？あれは少女だ。

幼女ってのはもっと小さい…。そうか貴様とは分かり合えないらしい。よろしい、ならば戦争だ。
しかし、金髪少女とは関係なしになんだか見覚えがあるようなないような。

「えーっと、どちら様？」

「そうだなー、君たちからすれば…神様？」

見覚えなどないだろう、きっと。こんな頭の痛い知り合いはいないはずだ。

「なんかひどいことを考えられている気がするんですが…」

するどいな。しかしそれを顔に出すことはない。

「気のせいだ。それで痛い子がなんのようなんだ？」

「その呼び方はひどい！必ずあとで訂正してもらおうとして…用は謝罪ですね」

口に出していたらしい。がそんなこと気にしない。痛い子は痛い子である。見た目が金髪『少女』でも痛い子は痛いのだ。決して少女のところを強調などしていない。

「謝罪？なんのだよ」

知り合いですらない痛い子に謝罪されることとはなんであろうか。

「君を殺しちゃいました。テヘ☆」

「（体全体を使って、撃つ！）」

ボクシングどころか何の武術も習ったことはないのだが、体が勝手に動いたとしか言いようのない速度でボディブローを打ち込む。情け容赦なく一歳の手加減なしである。

傍から見るとひどい光景だがそんなの知ったこっちゃない。そもそも周りに人いないし。

「思い出したぞてめえ！いきなり後ろから刺しやがって何のつもりだこのやろー！」

「…」

金髪少女は蹲って口をパクパクさせているが一切言葉が出てこない。自称神様も万能ではないようだ。

神様回復中…

数分後やっと言葉を発したのだが内容はこんな感じである。

あそこで寿命を迎える予定のおじいさんがいたんだが暗くて間違えた。

「はあ、仕方ない…」

「え、許してくれr」

「極刑に処す」

「転生させるから許してください！」

…今、何と、いった？

「好きな世界に転生させるから許してください！能力もあげるから許してください！」

「マジで？」

「マジです！真剣と書いてマジってレベルでマジです！」

土下座しながら必死にマジマジ連呼する神様はシユールだがそんなの気にしていられない。

だって転生だぜ！今となってはありふれてるかもしれないが転生だぜ！もう一度言おう、転生だぜ！

「もちつけ俺、そうだ古臭いネタでも使ってもちつくんだ…」

「ホントに古いですね…」

ボオオオディイイーブロオオオオー

神様回復中…

「よし、一度落ち着いたところで事実確認といこうか」

「サー！イエッサー！」

神様が従順なのは気にしてはいけない。きっと俺にはそういう魅力があるのだ。決して俺の右手がいつでも打ちだせるように固く握られているわけではない。

そんなことより話を先に進めよう。

「君が俺を間違って殺して、それが君の上司にばれるのはまずい。」

「はい。このままだと確実にばれます。だから魂を別の場所に動かして誤魔化すのが手っ取り早いんです」

「そして結果的に転生という形になると。」

「その通りです」

「よし、能力は『あらゆるものをきる能力』でよろしく。良くわからんだろうから俺の頭の中でも覗いてみる」

神様ならそのぐらいできるだろう。

ついでに言うところの『あらゆるものをきる能力』とは俺の黒歴史（Ⅱ厨二病）時代に考えていた能力である。

あらゆるもの。有機物、無機物という物体から時間、空間。果ては概念だろうがなんだろうがぶった切る能力である。

「あ、はい。では失礼して…」

えーっと、涙子ロケットwww涙子はうp主の嫁www

んーっと、おっくせんまん！おっくせんまん！

次は…」

それは昨日見た動画じゃねーか。ってまで、そんなことまでわかる
ということは俺の嬉し恥しい記憶なんかもみられるんでは…

神様搜索中…

「なんかすごいチートな能力ですけど大丈夫ですよ」

「そ、そうか…」

それから十数分恥ずかしい記憶を読まれ続けるという拷問をやっと
終えたところでOKが出た。

神様は気にしてないようだが俺はこの神様には一生逆らえない事が
決定した。つっても一生に一度会うこともないような存在だが。
そして、記憶を読み終わると次は何もないところで指を動かす。す
ると虚空に画面が浮かび様々な文字や数字が流れていき神様は素早
くそれを処理？していく。…近代的だなおい。

「自分で言っというて何だがいいのかそんなチート能力」

「まあ並行世界ってのは無限とも言える数がありますからね。チー
トな人がいてもそんな世界もあるって一言で片がつくんですよ」

「へー」

並行世界便利すぎる。

「それで転生する世界ですが」

「とある魔術の禁書目録」

「え？」

その間約0.01秒。とかいうぐらいの速度で右手を握りしめて構える。

「とある魔術の禁書目録」

「サー！イエッサー！！！」

よし、介入するぞー！主に科学サイド中心ではあるがな。魔術サイドは当麻さんに任せよう。

「あ、ひとつ注意事項がありました！」

「ん？注意事項？」

「はい、それは名前です」

「名前とな？」

「あなたの今の名前は这个世界での名前であって、別の世界では別の名前が必要なんです。その世界に受け入れてもらえる名前が」

：なんだか名前がすごい大事なもののようなのである。

しかし、名前と言われても生まれてこの方『谷桐 正厘』以外の名

前なんざ持ってねーし。あ？ペンネーム？痛すぎて使い物になるか。ここは素直に読み方を変えるとか簡単にしておこう。字も変えれば変わったって感じもするだろうし。

谷桐 正厘

谷…たに以外なら『や』かな？

桐…『きり』とか？やきり、か。まあ無くは無いだろう。たぶん。苗字は決定。

正…『しょう』とか『せい』とかだな。

厘…りんぐらいしか知らねーよ…。

「その字って『てん』とも読めますよ」

…神様が地味なところで役立った。
しかし『てん』と読むとすると。

しょうてん。却下。

せてん。晴天ってか？少年漫画の主人公とかやってそうだな。しかし、しょうてんよりマシか…

一応言っておくがこのときの俺は別の名前を考えるとかいう方向性は全く思いついていない。アホである。

やきり　せいてん：

「夜霧　晴天、かな」

「夜霧　晴天ですね：人のこと痛いとか言えないと思うんですけど」

本日最後のブオオオオディイイイイブオオオオオオオオオオオオ
オオ

神様回復中

「それでは転生先では頑張ってください」

慣れてきたのか数分で回復した。さすが神様である。

「ああ、それじゃ。神様も、もう間違えたり済んなよ」

「う、肝に銘じておきます。それではいつてらっしゃいます」

そして手を振って別れようと思ったのだが、俺は肝心なことを忘れていた。

こういう時のお約束といえば穴があいて落ちていくというものだ。バツと音がするほどの勢いで足元を見た：が何も起こらない。そして頭をあげると。

ゴンという音とともに頭にものすごい衝撃が伝わる。暗くなる意識の中で俺が最後に見たのは。

(金ダライって…ねーよ)

ところ変わらず真っ白な空間では。

「あれ？さっきの世界の人口がおかしいような…」

手元のウィンドウを使いあることを検索する。

「転生人口8人って…落とす場所間違えたかな…まあいつか。チートだし」

この後、正厘改め晴天がもう一発はボディブローを打ちに来ようと決心したことを神様は知らない。

プロローグ（後書き）

とまあ、こんな感じの流れなんです。

面白いと感じてくだされば是非続きを読んでほしいと思います。

面白くないぞこんなもん。と思った方は記憶の中からポイツと捨ててください。

では、続きを読んでもらえることを祈りつつプロローグは終了であります。

第一話 初遭遇は…えーないわー（前書き）

第一話である！

しかしそんなことよりも…感想きた！

まさかブログ時点で来るとか思わんかった！

お気に入り件数も2件。ほんとありがとうございます！

第一話 初遭遇は…えーないわー

どうも、私『谷桐 正厘』改め『夜霧 晴天』と申します。

後ろから刺され転生したわけですが生まれ変わる転生ではなく、そのまま世界に放り出されるほうの転生でした。

でも神様も気を利かせたようで見た目14，5歳になっているのだけは褒めてやろう：

ああ、見た目を気にしてくれたことだけはな：

「君はだれかね？」

「お初にお目にかかります！自分は夜霧 晴天といいます！」

なんで、落とす場所は考えてくれなかったんだ：

現在位置…窓の無いビル内

目の前…アレイスター・クロウリー

自分…直立不動

（死んだろこれ…）

いや、諦めるな俺。諦めたらそこで終わりだ。

むざむざ殺されるよりもマシな方向へ：せめて暗部との鬼ごっこ生活までは妥協したい：

っていやだよ。何だよ鬼ごっこ生活って。普通に人生を謳歌したいよ。

「…それで？」

「はい！ちょっとした手違いでここに入ってきてしまいました！」

……アウトー！ちょっとした手違いで入るような場所じゃねーだろ！それにもし本当にそうだったら即消されるのが落ちだろ！自分のアホー！

「…そうか、それでは少し待っていてくれたまえ。ここは外に出るのが難しいのでね」

落ち着け俺！このままなら死ぬ！なら少しでも流れを変えるんだ！

「いえ、その前に少しお話をしたいのですがよろしいですか？統括理事長：いえ、アレイスター・クロウリー殿？」

いきなりここだったから能力の確認もできてないが：覚悟を決めろ！俺が例のプランに少しでも利用できるならすぐ殺されることはないはずだ。

なら俺の利用価値を少しでも見せるのが今の俺に出来る生き残る手段！

「…何を知っているのかね？」

「全ては知りませんが、そうですね…ドラゴンという名は知ってい

ますよ？」

軽くカマをかけてみる。いや、ほんとにドラゴンって名前は知ってるよ？正体は全く知らんけどな！

「……：柵川中学在籍のLevel 10。よくも滞空回線アンダーラインに掛からずにたどり着いたものだ。それで？なにか要求があるのだろうか？」

キター！これでしばらくは狙われることは……無いと俺は信じてる！
：てあれ？柵川中学在籍のLevel 10？マジで？戸籍あったのか
：憑依転生とは思えないし神様の思し召しか？一応感謝しておこう。

「要求というほどのものでもありませんよ？ただ、あなたのプランに少しでも関わりたいだけですよ」

ここで関わることを明言しておけば今後、不測の事態があっても対応しやすいだろう。

魔術サイドにはあまり関わるつもりはないが多少のコネもほしいしね？

「……いいだろう。ただしこの場を生き残ることができれば」

：oh、せめて本格的な戦闘は力の把握の後にしたかったんだが。まあこのさい、ぶっつけ本番上等じゃねーか。

まずは『俺の位置座標を切り取る』
するとシュンという音とともにコルク抜きが転移してくる。

周囲の空間に乱雑に、だが。

「なっ」

後ろから声が聞こえるが無視して次の行動だ。

ある場所の『空気を切り取る』

空気が切り取られた場所は真空になり、そこに空気が流れる。

その瞬間、俺は後ろを向き姿勢を低くする。

ふわぁ

「ふむ、いいパンツ」

言い終わる前に5mぐらい蹴っ飛ばされた。

くそ、記憶に永久保存する前に蹴ってくるとはさすが座標移動…
ムーブポイント

「…」

あ、無言でコルク抜きを取り出した。

無駄なんだがなぁ。

「やめほいはほうはいお、いひひゃほうをいひっへるはらほこにとふかわはらん」

（やめといたほうがいいぞ、位置座標を弄ってるからどこに飛ぶかわからん）

駄目だ、これは通じてないなと自分で思う。

「…十分だ。後日正式に身体検査システムスキャンを受けてもらおう。それでそちらの条件をのもう。もちろんこちらのプランに影響を与えすぎないという条件付きでだが」

アレイスターには通じてた。さすが統括理事長。
ムーブポイント 座標移動…
むすじめ 結標

淡希^{あわき}はコルク抜きを戻してた。

「ひゅうふんへふ」
(十分です)

この後、外に出てからもう一度コルク抜きに襲われたりしたけど問題なかった。

生きてるって素晴らしい！チート万歳！

でもリベンジとしても一回見ようとしたけど結局蹴られた。何をだ
って？ PA☆N☆TUですが何か？

でも、そんなアホなことをしている最中に気付いたんだ：

俺の家ってどこ？

……晴天は目の前が真っ暗になった。膝から崩れ落ちるが結標さんは不審に思ってコルク抜きを手にとって静観している。

どうする俺、ここで家が分からないとか口に出したら確実にアレイスターに知れるだろ。

これはやばい……一つの危機を乗り切ったと思ったらまた危機が襲い
来るとは……これが学園都市か！なんと卑劣なところなんだ！

しかしどうする……はっ！こういう時はポケットとかに神様から
の手紙とかがあるはず！

とか意気込んで服の隅々を調べるがそれを見て結標さんが変な眼で
俺を見てたのは気付いてなかった……

手紙搜索中……

……

手紙搜索中…

………ないな。

うん、ない。見事はない。くそ、見つかったのは携帯と財布のみとは…ん？携帯が光ってる？

携帯を開くとそこには

メールが一件届いています

そっちの手紙かよ！確かに神様近代的だったけどさ！

その後しっかり家につけて一安心した俺だったが、そういえば結標さんはどうしたんだろうと思った。

もちろん俺が服を隅々探し終わった時点で帰っていて、俺の第一印象は変人として記憶されたようだ。

窓の無いビルの中では

「…これで7人。そろそろ予備プランとして起動するか。先駆けは先ほどの少年か、もしくはオーバードライブヘヴン叛乱歯車か…」

笑うアレイスターは怪しい独り言がつぶやいているが、その面倒事を押しつけられる晴天はまったくもって気づいていなかった。

第一話 初遭遇は…えーないわー（後書き）

豪さん、感想ありがとうございます！

主人公の能力名は次話で出す予定です！

それではこれから読んでいただける方がいることを願って第一話を終了とさせていただきます。

第二話 身体検査…の前にジャーマンスープレックス（前書き）

第二話です！

なんというか、すごい人が出てきます…

変な意味でぶっとなでますのでご注意ください…

第二話 身体検査…の前にジャーマンスープレックス

皆おはよう！転生初日でアレイスターに会ってきた晴天だ！
なんとかその場は乗り切ったが後日身体検査システムスキャンを受けるということになったのだが…

「お迎えにありがとうございましたにゃー」

「行動はえーよ」

朝起きたら家の中に誰かいた。金髪でサングラスかけたチンピラがいた。

……二日目までもが原作キャラクターに強制遭遇である。
なんでだ？俺はそういう運命とでもいうのか？そんなふざけた運命はぶった切る！うん、決め台詞はこれでいこう。

「…あんまり、驚かないんだな」

頭の中でまったく関係ないことを決定した。が、土御門が真面目な顔で言ってきたので俺も真面目に…無理、眠い。
しかし二言目ですでににゃーにゃー口調が消えてしまった。まだ朝なんだからもうちょっとふざけていたかったんだけどにゃー。

「あー、はい。土御門さんでしょ？暗部の」

「ほんとに知っているようだな…」

そりやもう色々と知ってますとも。原作読んでるんだもの。超電磁砲のほうはアニメしか見てないけどね。

「なんでもは知らんよ。知ってることだけだ」

聞き覚えがあっても気にしてはならないことが世の中には存在する。
…分かるな？

「用件はわかってるな？ 今から案内する」

「サーイエッサー」

そんなやり取りだけですぐに外に出て行ったので、俺も気だるげに返事をして特に準備もせずについて行った。

いきなりだが皆！今の俺の状況を三択問題にしてみた！挑戦してくれ！

1、ピンチ

2、大ピンチ

3、土御門について行ったらそこで俺を待っていたらしい奴が近くを通りがかった初春と佐天にパンツの色を聞いてピンチ！とか思

「だったら平手打ちを受けて大人しく…と思ったら「次は拳で!」とか言いながら更にテンションが上がってマジピンチ!

さあ、答えはああああああ!!!!!!

はい、3です。

ていうか本当に強制遭遇が俺の運命なんじゃねーか? そうとしか思えないんですが…

いやいやいや、そんなことよりフォローをしなければ。こんな変態と一緒にいて俺まで変態扱いは御免だ。

まずは腰に手をまわして、ガッチリホールド。

そのままブリッジに移行して…

「ふんぬらばあああああ!」

「あべし!」

ジャーマンスープレックスの出来上がり。

ふう、いい汗をかいた。とても清々しい気分だ。

「おお、生ジャーマンスープレックスだ!」

「おお、じゃありませんよ佐天さん! あなたもこんな所でそんな危険なことしないでください!」

「その場の勢いでやってできるとは思わなかった。後悔はしてないし反省もしない」

「「最悪だー！」」

うん、初春さんと佐天さんとの遭遇はいい感じだ。決して忘れられないことだけは断言できる。

まあ初対面の人間にパンツの色聞かれたと思ったらジャーマンスープレックスだもんな。…ここだけ聞くと訳がわからん。

「ああ、いいんだよお嬢さん方。この程度慣れているからね。そんなことよりパンツの色を」

「もう一発ご所望らしいな…」

「こんな大技をもう一発とは…君はSなのか！」

何故その台詞をととても嬉しそうな笑顔で嬉しそうに言うんだ。もしや俺は関わってはいけない人に関わってしまったのでは…

「さあ、やるのならば思いっきりやってくれ！」

「じゃあ遠慮なく」

そういえば土御門が消えてるけどどうなることを予期してたんだろうか。俺に面倒を押しつけるとはさすが暗部汚い。

そんな気持ちを込めて腰をホールド、ブリッジ、ジャーマンスूपレックスだー

「ふんぬらばああああ！」

「あべし！」

そんなことをしているとどうしたらいいのかと混乱した初春が逮捕します！とか言ってきたんで全力で逃げた。

……変態も一緒についてきた。

「それより身体検査はいいのかい？」

「あ」

その後、変態についていき研究所らしき場所に着いた。

「…ここでやるのか？」

「うむ。既に準備は完了している」

研究所とは思ったよりも大規模だな。普通にどこかの学校に案内されるかと思ってた。

「そのまま真っ直ぐいった部屋へ入ってくれ」

「了解」

そして、検査が始まったわけだが：特にいうことはないだろう。手の内をすべてさらすつもりはないので、とりあえず単純に物を切るだけにしてたんだが、学園都市製の特別な布やら合金まで見事にすっぱり切った。

ただ、一度切れないものがあつたんだがそこはほら、気合い？というかむかついたので概念ごとぶった切った。

そんなこんなで検査終了。Level 5か4：と思つたんだが。

「は？NonLevelってなんだそりゃ？」

「NonLevel、既存の法則では正確な能力値を計測できない異端。と言ったところだよ」

研究者が来るかと思つたのだが変態が結果を教えに来た。

そしてその結果は：『NonLevel』

「まさかそんな方向へ判断されるとは：」

「今まではNonLevelという扱いは公式には存在しないものだったんだが。それもとうとう今日で終わりかな」

（原作のほうでも出てなかったしな。この世界特有のものって考えといたほうがいいか）

とか考えていたんだが。

「これでNonLevel認定を受けたものは7人。アレイスター曰く頃合いだそうだ」

「…お前、何者だ？」

こんなところでアレイスターの名前を躊躇なく呼ぶなんて、思ったが今言ってたじゃないか。

NonLevel認定を受けたものは7人。公式に存在しないNonLevelの人数を把握してる時点で裏を知る人間なんだろう。だが、こいつは更なる爆弾を落とした。

「俺？俺は変態という名の転生者でNonLevel第一位をアレイスターから直々に仰せつかった唯の紳士だよ。あ、そうそう。この会話はアレイスターには聞こえてないから気にする必要はないかな」

………おう、もう何から突っ込むべきなのか分からないデース。ただ、一つ仮説ができた。とても嫌な仮説がだ…

「一つ聞きたい」

「なんだ？」

「他のNonLevelもまさか…」

「まさかもまさか転生者だよ」

………俺を含め7人の転生者の落ちた世界。なんでよりによってそんな世界に転生させやがった神様…ボディブローがそんなにほしいのか？

実のところ晴天を除いても8人だったりするんだがそれに気づくのはいつになるのか。その時の神様の運命やいかに！

その後、俺はNonLevelという通常のLevelとは違う枠組みの中に組み込まれ、

NonLevel第零位『無限乖離』
アシッドコラプション
カットオーダー
能力名…万象切斷

と呼ばれることになった。

……決して恥ずかしくなんかない。黒歴史を思い出すような名前をつけられて恥ずかしいわけじゃない！ないんだからな！
そして命名したのは変態である。もう一発ジャーマンスープレックスをやるべきか？いや、喜びそうだから却下だな。

その後の初春と佐天

「…結局何だったのかな？あの人達」

「分かりませんが次あったら逮捕です逮捕！」

「あはは…」

なんだか今にも指名手配しそうであるが、NonLevel第零位

と第一位というもうどんだけすごいのか？的な立場の人だと知って驚愕することになるのは案外もうすぐである。

第二話 身体検査…の前にジャーマンスープレックス（後書き）

海馬コーポレーションさん、感想ありがとうございます！

これからも面白く感じていただけるよう頑張っていきたいと思います。

では、続きを待っていてくれる人がいることを願いつつ第二話終了です。

第三話 NonLevel…全員集合！（前書き）

はい、なんだか文章が雑になった感があります。
やっぱりこの人数一気に出したのは失敗だったか…？

第三話 Non Level…全員集合！

システムスキャン
身体検査の翌日、現在俺は第七学区のレストランにいる。別にそれ自体は不自然なことじゃ…平日なのに集まってるのは不自然ですねはい。

でも仕方ないんだ。アレイスターからここに集まれって連絡があったんだもん。

あ、俺カレー丼で目玉焼きはしっかり焼いてください。

「失礼ですがお嬢さん、今日のパンツの色は何ですか？私は日替わりランチでお願いします」

システムスキャン
先日の身体検査で知り合った相変わらずの変態。

Non Level 第一位『オーバードライブヘヴン叛乱歯車』

「ねえ、こいつぶっ殺していい？あ、私はチーズハンバーグ洋食セツトね」

変態にパンツの色を聞かれてブチギレ寸前の…嘘です、もうブチギレてますね。手遅れですね。

Non Level 第五位『サイケデリックパレード暴虐葬列』

「…構わん。若鶏の唐揚げ定食」

少女に聞かれて先ほどまで無口だった男がやっとしゃべった。…ていうか構わんて！変態死亡フラグ！いいぞもつとやれ。

NonLevel第三位『イデオットマグナム火装地獄』

「めんどくせえ、とつと終わらせろやバカども。俺は明太子スパゲティな」

悪態付いてる不良。複数の制服が集まってる中で浮いているいかにもかませ犬ですとでもいいそうな雰囲気私服の一人。

NonLevel第二位『エイトビーター狂音瘴気』

「ああ：早く帰りたい：サイコロペッパーステーキをお願いします」

隅っこで小さくなってる頼りなさそうな少年。早く帰りたいと言いながらしつかりしたものの頼むのね。

NonLevel第六位『サドンインツイション突発直感』

「私はよくばりうどんに食後にチョコレートパフェとオセロアイスとミルクレープとプリンでお願いしまーす」

めっちゃ遠慮なく頼んでる。よくばりなのはうどんじゃなくてあんたの胃だ。

NonLevel第四位『ワーカーズフェノメノン超常細工』

とまあ今NonLevelの全員がここに会している。

あと顔をひきつらせながら笑顔を浮かべているウエイトレスさんが注文の確認をしてる。あ、はいお願いします。

「それでは第一回 Non Level 会議を始めたいと思いますが、まずは円滑なコミュニケーションのために自己紹介をしたいと思います。」

司会進行は変態に一任した。皆やる気が無いから仕方ないがこいつに任せて平気なのかも疑問である。

「名前は粗堅^{あらかた} 踐締^{ふみしめ}、好きなように呼んでください。第七学区の高校に通ってます。能力は『叛乱歯車』っていつて既存の能力の中に該当するものは無し。転生者です」

にっこり笑顔で紹介を終えた。が、周りの反応は3つである。

まず無反応が俺と第三位。

少しだけ反応したのが第四位。

声を出して驚いたのが第二位と第五位、第六位。

というかその反応を見てびっくりした。少なくとも三人は他のやつらが転生者って知らなかったのか。

第四位は判断に困るが、第三位は知ってたようだ。

「皆さんそこまで驚く必要はありませんよ。ここにいる方は皆一様に転生者です。一応言っておきますがアレイスターには聞こえないようにしているので心配はいりません。では序列ごとにお願ひします」

「……………信用できる証拠はあんのか？」

序列的に次の第二位が粗堅：もうめんどいし変態でいいよね？…を睨んでいる。しかし変態は笑顔を崩さず返答する。

「そうですねえ、証拠と言うならこの能力でしょうか。既存の能力には該当しないことや、Non Levelであることもですね。既存の法則にあてはめられない能力者達。この共通点も一つの証拠と言えますね」

「…第二位の倉城 貴也だ。長点上機学園に通ってる。能力は『破ブ砕騒音』扱いだが実際は別もんだ」

少し疑わしそうにしているがこの場は収まっ t

「年輪 空。第一位と同じ高校で能力は『発火能力』扱いだ」

心の声すら中断させられるほどに間をおかず第三位 g

「佐賀良 入抜です。常盤台で黒子ちゃんといっしょのクラスで能力は『物体強化』ですよー」

第四位も俺の心の声を t y

「私は裏領 透里。入抜と同じく常盤台で私は美琴と同じクラス。能力は『風力使い』扱いになってる」

第五位、おまえもな n

「僕は遠巻 残自です。学校は多分誰も知らないような弱小校です。能力は『予知能力』ってことになってます」

お前までもか第ろk

「ご注文のチーズハンバーグ洋食セットと若鶏の唐揚げ定食です。
お飲み物はドリンバーでご自由にお取りください」

……ウエイトレスさん！

泣いていいよね？もう泣いてもいいよね？嫌がらせにしか思えねーぞ！

「それで、お前は？」

第二位が俺に言ってきた。そういえば俺はしてなかったのか。

「俺は」

「柵川中学の第零位『アシッドコラプション無限乖離』夜霧 晴天さんですよ。この中で
は一番の権力者です」

心の声どころか返事すら許されない…鬱だ、死のう…って、え？権
力者ってなにさ？

「はいはい質問！権力者ってどういうこと？」

佐賀良さんが俺より先に疑問を投げつける。

「言葉そのままの意味ですよ。晴天さんがアレイスターと直接交渉
をしたことで予備プランである我々全員にメインプランへのある程
度の干渉が認められたんです。」

うえ、俺のその場しのぎの交渉がそんなことに…しかしそれで俺が

一番の権力者とは何故なんだ？

「そして、晴天さんは我々の干渉の度合いを判断し、問題があるならば処罰する権限が与えられています」

俺の心の中など気にせず話を進めていく。

しかし処罰ってなんとも嫌な響きだ。される方は嫌なんだろうがこっちだってそんなことはしたくない。

「処罰の方法は一任されます。暗部を使って追い詰めようが、道具のように扱おうが、手早く殺すことも許されています」

……沈黙が痛いよ！最悪の空気です！こいつを司会にしたのはやっぱ失敗でした！

なんでそんな爆弾発言を笑顔で言っちゃうんだよこいつはあああああ……あ……！

「これは既にアレイスターが決定したことです。我々に何か言う権利はありません。文句を言うよりも建設的なことを話し合います」

「…例えば？」

爆弾発言をしてくれた訳だが文句が出る前に別の話題に変えた。それに合わせるように第三位もその話に乗ってきた。

「どのように干渉するかですね。それぞれがどのように動くか分かっているれば干渉も制御しやすいでしょう？」

「ならば俺は干渉する気はない。俺は俺の目的さえ果たせばそれ

でいい。話がそれだけなら帰るぞ」

「私は空についてくから。それじゃ」

そう言って第三位は返事も聞かずに出て行き、第五位もそれについて行った。

その後は他のやつも勝手に宣言して帰って行った。

最終的にはこんな感じだ。

俺は原作沿いで科学サイド中心に干渉。

第一位も原作沿いで当麻と一緒に行動。

第二位は原作ブレイクする。処罰するなら勝手にしろ。

第三位は無干渉。

第四位は原作キャラクターと一緒に平和に暮らしたいな！。

第五位は第三位といっしょ。

第六位は目立ちたくない。

無干渉組多いな。七人中四人かよ。

「問題ありそうなのは第二位さんだけですか。まあ、どうするかは先ほど言った通りあなたに一任されるので頑張ってください」

「…………もうどうにでもなれ」

その後は特に何もなく家に帰り惰眠をむさぼった
…といえればよかったんだけどなあ

「あんたたち！勝負しなさい！」

今日は六月十七日。御坂美琴がスキルアウトに絡まれていた所に上条当麻が乱入した日である。

：見事に巻き込まれてしまいました。

第三話 NonLevel…全員集合！（後書き）

今回はNonLevel全員の顔合わせ会でした。

おそらくこれ以降全員が一緒に出ることはないでしょう。

次回からとある科学の超電磁砲が開始です。

お楽しみいただけることを祈っております。

それではこれにて第三話終了とさせていただきます。

第四話 晩飯求めて…原作介入（前書き）

晴天原作介入！

我らが主人公の上条当麻と御坂美琴の出会いに介入です。
では第四話の始まり始まり…

第四話 晩飯求めて…原作介入

NonLevel会議とやらが終わり家でだらだらしてたわけだが…

「飯がねえ…」

である。

転生した日は疲れて家に帰ってからはずぐ眠り、翌日朝から身体検査に連れて行かれ昼は研究所で出されて夜は変態に奢らせた。

そして今日の昼はレストランである。もちろん代金は変態に任せた。結果的に家の台所なんて見もしなかったわけだが、とうとう今日見ることになった。

冷蔵庫の中身

チーズ

ムサシノ牛乳

バター

ヨーグルト

経済事情

財布（1万2352円）

通帳（0が6個）

…あれ？

通帳をよく確認してみる。

1、2、3、4、5、6…え？

「……………え」

なにそれこわい

今までLevel10だったんですね？なんでこんなに金があんの？神様なんかした？

ブーブー

あ、メール。

神様

non title

なにもしてないですよ。

NonLevelになったからじゃないですか？

あーなるほどー。NonLevelってこんなに高いのかー…………

高すぎだよ！学生に渡す金じゃねーよ！

あ、そのまえにもう1個。

冷蔵庫の中身おかしいだろ。よしこれでオツケー。

現実逃避はこれぐらいにしておこう…
何をしようが結局のところは、

「飯がねえ…」

である。好き勝手だらだらしてたせいですでに外は薄暗い。

「仕方ないしコンビニで適当に買ってくるか」

道はよく分からないが学園都市製携帯電話さまである。GPS機能がめっちゃ見やすい。おかげで迷わずコンビニにつけそう。だったのだが…

「あーそうだよ。恥ずかしくねーのかおまえら！こんな大勢で女の子を囲んで情けねえ」

声のした方に顔を向けるとそこには大勢の不良達と我らが主人公『上条 当麻』と『御坂 美琴』がいた。

「大体お前らが声かけた相手をよく見てみろよ。まだガキじゃねーか！」

御坂が少し反応したのが見えた。うん、まあ本人の前で言う事じゃねーわなあ。

「さっきやり取り見ただろう！年上に敬意を払わないガサツな態度、見た目はお嬢様でもまだ反抗期も抜けてねーじゃん。そんなガキだぞ！」

御坂さんマジギレまであと8秒です。

「俺はな！お前らみたいに群れなきやガキも相手にできないような奴らムカつくんだよ！」

「私が一番ムカつくのは…お前だああ！！！」

ごもつとも。しかしそれで周りにまで被害を与えるのはいかがかと。

とか思いながら飛んできた雷を能力を使って払ったのだが：

呆然とした顔で御坂が上条と俺を交互に見ている。

あれ？俺も？えっと、見られた？

そして状況はさらに動く。近くの店から常盤台の制服の少女が出てきた。

「あれ？あんたって確か：晴天だったっけ？」

「あ、裏領さん：だよね？」

その少女はNonLevelの第五位だった。そして俺と上条、御坂を見てニヤーと笑う。嫌な予感のする笑みである。裏領は御坂に近づいてこそそと何かしゃべっている。

「はあ！なんですって！」

「嘘だと思うなら試してみれば？」

御坂の顔がさらに怒りに染まっているような気がするのは気のせいだ。きっと気のせいだ。

だから俺と上条を指差して次言う言葉が俺の予想通りであるはずがない。きっと違う。

「あんたたち！勝負しなさい！」

「「だが断る！」」

俺の予想通りの言葉を聞いたところで回れ右！駆け足始めー！のよ
うに俺と上条は軍隊も驚きの動きでその場を逃げ出した。
御坂もここまで馬鹿正直に逃げるとも思わなかったらしく硬直して
たがすぐに追いかけてきた。

待ちなさいー！とか聞こえるけど今回は無視しておいて隣の上条に
話を振る。

「えっと、お兄さんのお知り合いで？」

「いやいやいや、あんな凶暴な中学生の知り合いはいねーから！そ
っちこそ違うのかよ。もう一人とは知り合いなんだろう？」

「後から出てきた方は今日知り合ったばかりで、もう一人は知りま
せんよ」

嘘です。超知ってます。というか上条さんのこともよく知ってるん
だけどね。

しかし偶然とはいえ丁度よかったかな。科学サイド中心といっても
天草式にだけは干渉するつもりだったし。

理由？生五和さんがみたいだけですが何か？

「くそ、なんで夜中に少し出歩いただけでこんなことに…不幸だー
！」

おお、不幸だー！を聞くとなかなか感慨深いものが…

しかし上条が不幸なように俺には空腹という危機が迫っているので
御坂には悪いがここは逃げさせてもらおう。

「お兄さんそこを左に入ってつきあたりを右に行ってください。」

「了解！」

携帯を見ながら上条に指示を出す。

上条もこのまま大通りを進むのも分が悪いと思ったのか指示通りに路地裏に進む。

「って、行き止まりじゃねーか！」

「大丈夫ですよ。ちょっと待っててください」

上条はうろたえているが気にしない。まずは『目の前のビルを視界から切り取る』これでその先が見えるわけだが、無人の公園だ。

邪魔になる遊具もないので『公園までの道筋を切り取る』それから数秒待つ。

「上条さんちょっとこっちへ」

そう言って無理やり壁の方に連れていくとあら不思議。いつの間にか公園へ。

「こ、公園？」

「まあ、俺の能力ですよ。それよりも俺腹が減ってるんですけど、さっきのことは違うコンビニって近くにありますか？」

「あ、ああ。案内するよ」

「そうですか？ありがとうございます」

上条は右手を見ながら首をかしげているがちゃんと案内してくれた。まあ、無理もない。異能の力ならすべて打ち消す右手のせいで空間移動もできないはずなんだから。

しかし俺がやったのは空間移動とは違うからな。

俺の能力は『あらゆるものをきる能力』であって、俺がしたことも『公園までの道筋を切り取る』だけだ。

要は道筋を切ったのは俺の能力だが、切られた道筋自体は異能の力でも何でもない。ただの道なんだから。

だから上条の『イマジネーション幻想殺し』で打ち消されることもない。ということだ。

そんなことを考えてたらついたようだ。

「ここだ。んじゃ俺は帰るぜ。見つかったりしないように気をつけろよ?」

「はい、お兄さんも気をつけて」

そう言って俺はコンビニの中に入って適当に晩飯を買っていく。

途中で見つけたとか不幸だとか聞こえたのは気のせいだろう。たぶん。

その頃の上条当麻

「見つけたわよ!」

「げ!こんなとこまで追いかけてきたのかよ!」

「私と勝負しろー!!!」

「不幸だああああ!!!」

とある少年の叫びはコンビニまで聞こえたのかなんとか。

第四話 晩飯求めて…原作介入（後書き）

偶然にも原作介入。

これから晴天の科学サイドへの介入が始まる！…と言いたけど実はこれから一か月は晴天の介入できそうな事件がないんですよ。

ということで原作介入というよりも晴天の日常を描くことになりそうだ…

まあ、これにて第四話終了であります。

第五話 休日の中…感じた本気（前書き）

最近一次創作の小説にはまってしまっ更新がおろそかになってました。

すいません。

しかし、おもしろいですね。いろんな設定や世界観を見るのもいいものです。

今までは二次創作ばかりみてきたけど一次創作もいいものだと思うたRavenです。

では遅くなりましたが第五話の始まりです。

第五話 休日の中…感じた本気

上条と一緒に御坂から逃げ回って数日がたった。

その間にNonLevelの存在が公表されたが、それぞれの異名と既存の法則では測定できないという説明だけで名前などは公表されなかった。学生の間では噂にあがる程度だった。

そしていろいろと分かったことがあった。

まずLevel5の序列だ。

一位から七位までは変わらないのだが第八位がいたことが分かった。名前は年輪空：NonLevel第三位の転生者である。

あの変態曰く、目的のために少しでも権力があるほうが都合が良かったかららしい。

まあNonLevel第三位だったのでその肩書もなくなったようだが、急に肩書がなくなったせいでNonLevelの一人だと噂されていた。見事に正解である。

そしてNonLevelだと自分から宣言してるのが第二位の倉城である。現在その肩書と実力でスキルアウトを集めている。

統制は取れているのか他のNonLevelに手を出してはいない。しかしどう動くか分からない以上警戒が必要だろう。

他のメンツに関しては特に必要以上には動いてないようだ。せいぜいが同じ学校や組織に入っている間での交流ぐらい。

俺も初春と佐天とは友達になった。最初の出会いが強烈過ぎて最初は拘束しますとか言われたがそれのおかげで距離が縮まったともいえよう。一応変態に感謝：はしないでもいいか。

そうそう、一番気になっていた問題も解決した。俺の学校での在り方だ。

予想通り憑依転生ではなかったのだが、転校生というわけでもなく、今までいなかった人間が当たり前のように居座っている感じである。しかし、それを疑問に思っても不審には思わないらしく本当に当た

り前のようにクラスに馴染むことができた。

……さすが神様。確認取ってないから多分だけど。

まあ、このようにいろいろあって今日は休日なので適当にぶらぶらしている。

いや、ぶらぶらしていた。が正しいだろう。

「ふむ、興味深い能力をしているな。君は」

「いえいえそうでもないですよー」

超棒読みである。

しかし、これは本当に俺の技能欄に強制遭遇…A++があると思うんですけどーよ？

……だってなんで木山春生にこの時期に遭遇するの？まだ銀行強盗すら起ってない…ってそういえば銀行強盗した奴も幻想御手使ってたんだから別におかしくはないのか。

「服の汚れだけでなくアイスまで元に戻すとは、時間に干渉する能力かな？」

「そんな能力があったらLevel5入りでしょう。それよりいいんですか？荷物もあるようですしどこかに行くところだったんでは？」

とりあえずこうなった経緯を説明すると、

俺の前で子供が木山にぶつかる

持ってたアイスが木山の服に付く

木山脱ぎ始める

俺全力で能力行使

アイスが落ちたという事象を落ちなかったことに『切替える』

木山興味を持つ

である。それから今はお馴染みのレストランにいる。

「用事が終わって帰るところだったから問題ないよ。それと理論上時間に干渉する能力は存在する。実用的とは言えないらしいが」

「まあ、俺の能力は違いますよ。精々Level4止まりですし」

「Level4であんなにも見事に復元できるものとは思えないが？もしそうならまるで：『既存の法則に縛られていない』ようだ」

「っ！ぐ、ゲホゲホ！うえ、なんか変なところに入った」

「…面白い反応をするな、君は」

動揺を隠そうとしたら飲んでたジュースが変なところに入った。経験ない？なんかすごいせき込むところに入ったりとか。え、ない。そうっすか…

まあお気に召したようだなによりだ…決して負け惜しみじゃないやい。

「決してNonLevelではないですよ？」

「目をそらしながら言ってもな。というかそれは自白してるようなものだと思うが？」

自分もそう思う。

「…他言はしないで下さいよ。スキルアウトに狙われるのは遠慮したいんで」

「…交渉がしたい」

たった一言。そのあと木山は俺を真っ直ぐ見据えながら俺の言葉を待っている。

おそらくは俺たちの法則に縛られないということに着目して幻想御手とは違う方法も考えるのだろう。

目的を達成するためにあらゆる方法を模索し、障害を力づくで排除するのも辞さない。

そういう考えは……………

「嫌いじゃない」

「？なんのことを言ってる…」

「要求は俺たちに研究の実験動物モルモットになれというんだろう？それに関してはある程度の融通をできる。俺が知りたいのは対価に何をくれるのかだな」

「…！どうして分かった、というのは無駄な問いなのだろうな。その通りだ。対価にはこれを」

そう言って木山が出してきたのは予想通りの幻想御手。俺は迷うこ

となくそれを真っ二つにした。

木山が驚くのも無視して話を続けた。

「残念ながらこいつの構造は知ってる。法則に縛られない俺らが法則に縛られても意味はない。他にないなら俺らを動かすことはできない、

『子供たちは諦めろ』」

俺が言った瞬間にドンツという音がレストランに響く。木山がテールをたたきつけた音だ。

休日だけあって周りに人は多いが注目は集まらない。もちろん俺の能力だが木山にそれに気づく余裕はない。

「諦めろだと！何故知っているかは聞かない！それでも君は知っていて、あの子たちがどんな目にあっているか分かっていて、それでも諦めろというのか！君は、諦めろと！」

「ああ、あんたの決意がその程度ならな。俺は言ったぞ、こいつ以外にないなら俺らを動かすことはできないと。あんたがこれ以外に俺らに利益をもたらせないのか考えろ。考え抜いてまた俺に会いに来い」

俺はそれだけ言ってレストランを出た。これがどの程度物語を変えるのかは分からない。が、それでも面白くなりそうだと俺は思う。

「一応根回ししておくかな」

携帯を開いて唯一知っているNonLevelに電話をかける。が出たのは予想外の相手だった。

「おもしろいことをしているようだな」

「…こっち側なら問題ないだろう、アレイスター。そっち側には必要以上には踏み込まねーよ」

「そちら側でも必要以上には踏み込まないでほしいのだから。まあ今回は目を瞑ろう、根回しはこちらでしておくが構わんな？」

「ああ、任せた」

そう言って通話を終えた。少しくぎを刺されてしまったが、平気だろう。

これから木山の動きによっては原作が大きく変わる可能性もある。原作沿いにとか言ってた自分にしては早い気の変りようだけど仕方ないだろう。

あの木山の目を見た瞬間、この世界に生きる人間の本気を感じたのだから。

「まだまだここに生きる自覚ってのが足りてなかったのかねえ」

俺が生きてるのは物語の中じゃない。

今この瞬間、俺が感じているのは仮初なんかじゃなく、本物だった。

レストラン内

「お客様、どうかなさいましたか？」

「え？あ、ああすまない。大丈夫」

彼が出て行ってから何分そのままでいたのか。店員に謝罪してレストランを出た。

右手の紙を握りつぶしながら先ほどの事を思い出す。

『ああ、あんたの決意がその程度ならな。俺は言ったぞ、こいつ以外にないなら俺らを動かすことはできないと。あんたがこれ以外に俺らに利益をもたらせないのか考えろ。考え抜いてまた俺に会いに来い』

右手に握りしめた紙をポケットにねじこんだ。

紙にはこう書かれていた。

『猶予は1週間、あんたの本気を見せてくれ NonLevel第
アシッドコラボション
零位『無限乖離』』

ああ、考え抜いてやるさ。君が思いもよらないような利益をもたらして、必ず協力してもらう。

待っている。NonLevel!

第五話 休日の中…感じた本気（後書き）

という感じで木山春生と遭遇した主人公でした。

なんだかいつもと主人公の感じが違いますが、転生して初めて本気をぶつけられて感化された。という風に解釈してもらえるとありがたいです。

そして、とらふぐさん感想ありがとうございます！

オリキャラの方も原作が始まれば出番が増えるので楽しみにしてください！

ではではこの辺で第五話おしまいっと。

第六話 平々凡々…にはいかなかったorz（前書き）

またまた更新が遅くなったRavenです…ほんとすいません。
早速ですが前書きはこの辺で第六話をどうぞ！。

第六話 平々凡々…にはいかなかったorz

木山春生と出会ってあっという間に一週間…とはいかずまだ三日目である。

もちろん平日は学校に通っているわけで今は授業中なのだが…

「夜霧、Personal Realityについて説明してみろ」

こんな感じで当てられることもあるわけで、学園都市で授業を受けたことのない俺には大抵の常識が難問という残念な状況だ。

しかーしパーソナルリアリティなら答えられる！

「自分だけの現実、いわゆる妄想です！」

胸を張って良く通る声ではっきりくっきり答えました。

俺の左に座る佐天が笑う顔を教科書で隠し、左前に座る初春は口を押さえて横を向き、前に座る高梨さんが下を向いて方を震わせ、右前に座る山田がぶふっとか噴き出したような声を出し、右に座る袴は…寝てるな。

そして肝心の教師の反応はやれやれといった感じで頭を振り、

「ハア…」

「ちょ、なんすかその反応！合ってますよね？」

「間違っていないだけで正解ではないな。こんな反応をされたくないなら次の授業までに今日の分も含めて復習しておけ」

いいな、と教師が言ったところで鐘が鳴り日直の号令で授業が終わ

る。

やっと終わったと思いい机に突っ伏すとすぐに佐天と初春、山田が寄ってきた。

「「さすが夜霧（さん）」」

なんだそのシンクロは、褒めても何も出ないぞ。

「しかしほんとに超能力に関してだけ頭悪いよなお前。他のは普通に上位なのにさー」

「ほんとだよー。私より悪いってやばいよー」

と言われても超能力以外は既に習ってるけど超能力はまだ習い始めて一週間と経ってないんだから仕方ないじゃないか。まあ口には出せないんだけど。

「俺からすると超能力の小難しい用語が覚えられてなんで他のができないのかと思うんだ…」

「あはは、学園都市に来る人の大半は超能力に憧れがありますから。やっぱりやる気が違うんですよ」

初春の言う事にそんなもんかねえ。と返していると隣の席がもぞもぞと動き出した。袴が起きたようだ。

ここで新しく出てきたやつらを紹介しておこうか。

俺の前の席の高梨たかなし 公さんきみ。前の席なので時々話す程度でそこまで仲がいいわけじゃない。

という事で次は山田…

「山田って名前なんだっけ？」

「知らなかったの！てか山田じゃなくて山滝やまたき 玉谷たまやだ！」

「すまんすまん。大和田おおわだ 五三郎ごさぶろうだな。分かった覚えとく」

「誰だそれ！全く原型がねえ！」

「違う違う小山田おやまだ 五三郎ごさぶろうだよ」

「原型があればいいってわけじゃ…て山田に近づいてんじゃねーか！しかも五三郎って誰だ！」

「ゴサブロウⅡヤマダですね！」

「だから山田じゃねーしゴサブロウって誰だっつってんだろ！なんだそのロボットが戦うゲームに出てそうな名前は！」

「なんだか山田が文句ばかり言ってきたるが気にしないでいいか。とりあえずこいつは仲のいいやつでLevel 11の精神感應系の能力者だ。」

そしてもう一人の男がポンと山田の肩をたたく。

「おお、袴もなんか言ってくれ！」

袴かみしも 左右さゆうという名前なの？と突っ込みたくなる名前のこいつは常に眠たげで気だるげで気まぐれなLevel 3の能力者だ。

能力については詳しい事はわからん。機械に干渉する能力のようだが、こいつ自身使い方を把握できてないらしい。

「頑張れ…………金子」

「う、うわぁー！！！！！！ん！！！！」

見事な止めです袴さん。

そして帰り道。今一緒にいるのは佐天と袴の二人だ。

初春は風紀委員の仕事で山田は家の方向が違うので別れて帰っている。

三人で喋って、ちつとぼっかり買い食いをしながら帰る。学生生活を満喫していて楽しそうに見えたんだろう。

そしてそういう楽しそうな学生生活を見てるのが嫌な奴らもいるわけ。

「おうおう、かわいい子連れてんじゃねーか」

「えーお前こんなガキが趣味なのかよ」

こんなことを言いながら七人ほどの無能力者集団が近寄ってきた。スキルアウト

俺は佐天の手を引いて背中に隠すようにする。佐天は怯えていて袴は後ずさるように一歩足を下げていた。

あー、駄目ー、ヤメテーとか心の中で思っているが、スキルアウトはそんなことに気づいてくれることもなく更に近寄ってくる。

「あー、そういえば俺金がないんだった。貸してくんねー？」

スキルアウトの一人が袴に近づいていく。

こんなときでも眠たげで気だるげなのは変わらないで、それに比例するように佐天の怯え度がグングン上がっていく。
そしてフラッと袴が揺れたかと思うと。

「…っる」

「る？」

「せえ…！」

ゴガンツとかありえない音が鳴り響く。単純明快な頭突き一発で一人撃沈。

袴左右は見た目は眠たげで気だるげで、そして中身はとても短気で強いのである。能力関係なしに。

残り六人が呆然としている間に袴は一人に拳を、一人に蹴りを放って一撃で沈めていく。

「んな…！てめえぶっ殺すぞ！」

スキルアウトも四人になってやっと動き出した。

能力も使いたしたがLevel2程度の念動力と発電能力かな？あとは使っていないのか使えないのか分からないが殴ろうとして即沈められている。

「やれるもんならやってみろ」

あーそんな挑発なんかしないで袴さん。と思いながら少し離れた所

から眺める。

え？もちろんスキルアウトが呆然としてる間に逃げましたが？佐天はいいのかなあとか言いながら一緒に眺めてます。でも動こうとしないのは袴の強さがわかってるから…ではなく巻き込まれたくないからだろう。

だって、ねえ？袴と仲良くなって数日の間に六回スキルアウトと出会い、計21人を袴一人で全員鎮圧している。そして一回は俺もまとめてなぎ倒されそうになり言われた一言が「邪魔」である。その時は佐天もいたのでそりゃ近づきたくないだろう。

「袴ー！風紀委員が来る前に逃げるぞー！」

「…了解」

俺が言うと、いつの間にか発電能力者は倒れていて最後に念動力者も沈めてこっちに戻ってきた。

うん、なんかもう能力の意義を疑う光景だなあ…

三人逃亡中…

「ふう、ここまで来れば大丈夫っしょ」

「多分」

「なんか…二人とも…手慣れてない？」

俺と袴は余裕の表情で佐天は息を切らしている。うん俺も最初はそんな感じだったさ。慣れたけど。

「しかし無駄に時間も食ったしこのまま家に直行かな」

「またか」

「あーうん。そうだね…」

佐天は呆れ気味のようにだ…何故に？

まあいいや。袴はここで別れて俺は佐天を途中まで送り届けることになった。

「えー別に大丈夫だよ？ 気を遣わなくても」

「よし、しゅっぱーつ」

「スルー!？」

その後はスキルアウトに絡まれることもなく無事に送り届けました。
ええ無事送り届けました。

そして、

「お早い事で」

「一分一秒が惜しいのでな。君の望むものを見つけてきたぞ第零位
アシッドコラプション
：『無限乖離』」

俺の前にはクマを更に深くした木山春生が右手にアタッシュケース
を持って立っている。

「ではお話を伺いましょうか。俺の家まで来ます？」

そう言って木山春生の横を通り過ぎて自分の家に向かう。が、

「ああ、そう…：しよ…：う」

ボタンという音がした。

恐る恐る振り返るとそこには木山春生が倒れていた。時間も少し遅く俺の家は少し特殊な立地なので周りには誰もいないし、これから交渉をする予定だし俺の家に運ぶことにした。

そんな中でなんとかどうしてといったことは全く思いつかなかった。たったひとつ思いついたことは一つだけ。

「この展開は予想外…」

その頃の黒子&初春

「ここですわね、ってこれは…：初春、本当にスキルアウトが暴れていたんですの？」

『え、ええ。そのはずですけど…：』

黒子の問いに初春が言い淀む。まあそれはそうだろう。

「…スキルアウトが被害者にしか見えませんわね」

スキルアウト七名。ボロボロのまま路上放置されていた。
：先に絡んできたのはスキルアウトのだが現場を見てない以上ス
キルアウトが被害者にしか見えない状態であった。

第六話 平々凡々…にはいかなかったorz（後書き）

でしたー。

まずは感想返信です。

なんでもやさん感想ありがとうございます！

大好物と言ってもらえるとは…めがっさがんばります！

紅鎖さん感想ありがとうございます！

紅鎖さんの言うとおりはほとんど全員要注意人物です。はい。

それぞれ目的を持っている方は我が道を行く方々ばかりですので…
お楽しみに！

たくみでっすよwさんですよね？…たくみさんと呼ばせていただきますね？

体に気をつけてがんばります！これからもよろしくお願いします！

御坂自由さん感想ありがとうございます！

指摘通り普通は不可能のように思えますが、純粋な高圧電流である
以上手を前面に突き出していれば多少狙いを外しても雷が勝手に手
の方に寄ってくる…と20巻で言っていました。

でもそれ以外にも理由はあるので魔術側の原作が始まるまで読んで
もらえれば幸いです。

皆様感想をありがとうございました！

これからがんばっていきますので続きを楽しみにしていただける
とうれしいです！

以上で第六話終了です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2390n/>

死亡→転生→学園都市…あるえー

2010年10月11日16時40分発行